

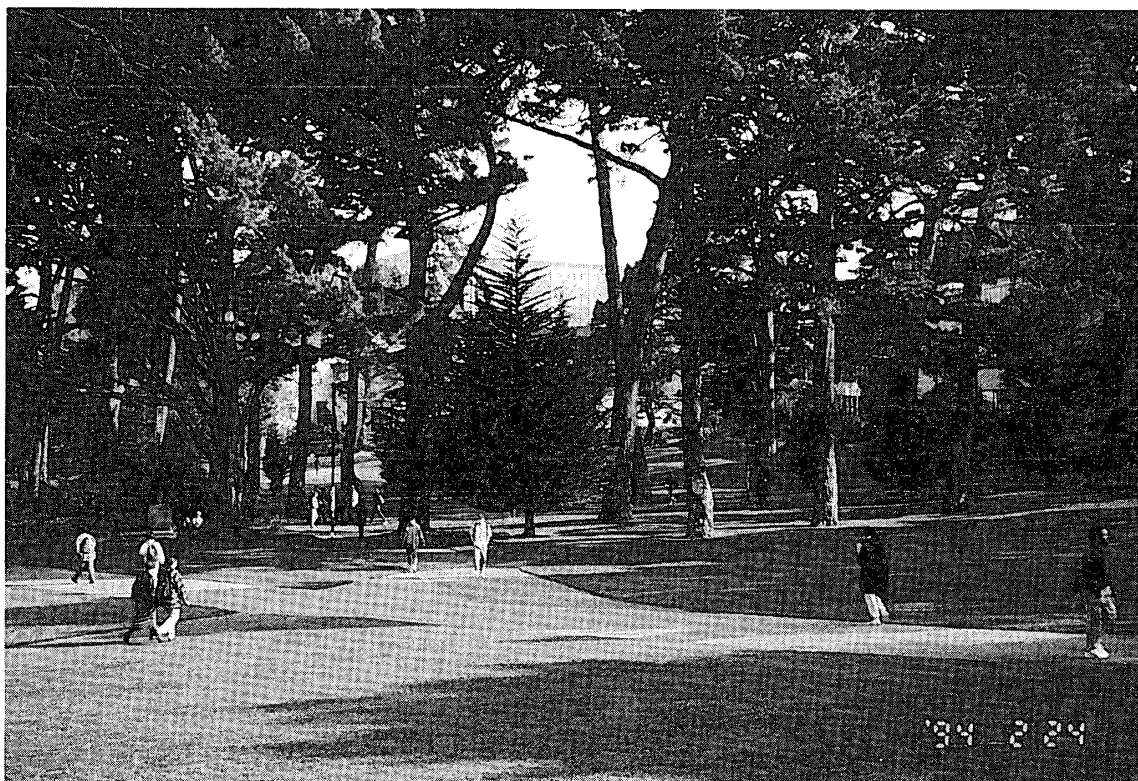
〈論文〉

# 州立サンフランシスコ大学ケニヨン事件 — 宗教教育と学問の自由 —

うのうら      ひろし  
鵜 浦          裕

## 1 はじめに

本論はカリフォルニア州の州立サンフランシスコ大学科学部生物学科の正教授が、短期間にせよ、その担当コースからはずされた事件についてレポートするものである。生物学の授業中に宗教的信条を科学として教えたことが主な原因とされているが、この処分をめぐる緑の静かなキャンパス（下の写真参照）が二分された。そして全国ネットで報道されるにおよび、この事件は大きな訴訟にまで展開するとさえ思われたのである。



州立サンフランシスコ大学のキャンパス

日本でもアメリカでも、大学の講義が世間でとり沙汰されることはほとんどない。とくに文系の講義については、しょせん世間では役に立たないものが多いと思われている。また、学生は単位さえ取ればあくびがでるほど退屈な講義であってもがまんするしかないとわりきっている。つまり、無害であるかぎり世間も学生も大学の講義にあまり注目しないのだろう。

この無関心にくわえて、とくに日本では教授の身分が手厚く保護されているため、彼らにとって大学は天国となっている。いったん教員として採用されれば、その資格が問われることはほとんどない。研究業績がないこと、講義の手抜き、勝手な休講、研究費の無駄遣いなどは問題にすらならない。セクハラ、成績改竄なども、幸か不幸か、罷免の決め手とならないこともあるときく。アメリカでもさして事情は変わらないであろう。

こういうわけで、大学教授が講義内容の不当を理由にその担当コースからはずされるのはきわめて異例である。本論はアメリカで起きたこのまれな事件をとりあげ、それによって、日頃かえりみられることの少ない大学教授の権利や義務、講義のあり方などを考える機会としたい。

大学教授が担当している講義からはずされるのは、いついかなる場合であろうか。こう問いなおしてみると、大学の「どうでもいい」講義にはじつに多くの問題がふくまれていることがわかる。たとえば、講義の内容とレベルを決める基準は何か。その基準を決めるのは誰か。あるいは、大学教員に言論の自由はどこまで保証されているのか。たとえ学界の支配的な見解に反していても、自分の信ずるところを教えていいのか、などいろいろな疑問がつきつきとわきだしてくる。断るまでもなく、こうした疑問には、「英語の時間には英語を教えていけばよい、歴史の時間には歴史を教えればよい」といった単純な考え方はまったく通用しない。

ただしこの事件がアメリカで注目された理由はほかにもある。「生物学の時間には生物学を教えていけばいいのだ」という常識論では片づかないアメリカ独自の歴史があることを指摘しておかなければならない。つまりこの事件の背景にはキリスト教創造論者と進化論者の間の積年の確執が存在するのである。

1987年以來、連邦最高裁判所で争われるような大事件こそしばらくはないが、「創造論 vs 進化論」論争のほや騒ぎは90年代に入ってもあいかかわらずアメリカ各地で頻繁に出火している。今回の事件もこの宗教と科学の対立の延長線上に起きたものだといえる。

この対立の発端は遠く1920年代にまでさかのぼる。当時、アメリカ南部の数州では公立学校でヒトの進化を教えることを禁止する州法が相次いで成立した。「聖書の創造説を否定する進化論教育は子供の道徳的発達を妨げる」というのがその成立理由であった。

この反進化論州法を葬り去るために、アメリカ公民権連合 (ACLU) は裁判を仕掛けた。ACLU はテネシー州デイトンの高校教師ジョン・T・スコープスに依頼し、科学の授業中故意に「ヒトの進化」にふれさせ、創造論側からの告訴を誘い出した。その結果、スコープスは罰金 100 ドルの有罪判決を受け、進化論側が敗訴した。ところがこの判決とは反対に、マスコミが創造論側の「愚かさ」を大々的に報道したため、あたかも進化論側が勝利したかのような雰囲気となり、逆に勝訴したはずの創造論運動が致命的な痛手を負った。これがいわゆる通説である。

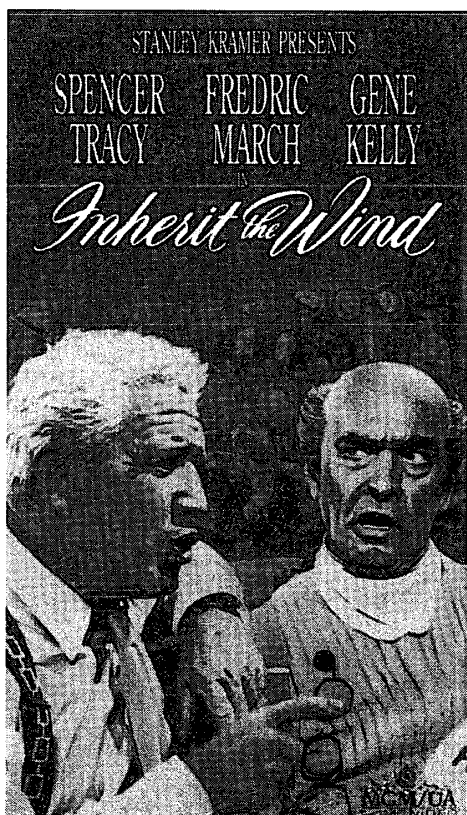
確かにスコープス裁判については、このような印象をもつ人が多い。しかし、スコープスが代用教員だったこと、実際にヒトの進化についてふれたかどうかは本人すら覚えていなかったことなど、この裁判には怪しいところがたくさんある。「創造論運動は終わった」という神話がいつ成立したのか定かではないが、この裁判を進化論側勝利の立場から描いた劇や映画 (『インヘリット・ザ・ウィンド *Inherit the Wind*』, 下の写真参照) が、大きく寄与していることはまちがいない。

スコープス裁判以後、進化論関係の記述が中等レベルの生物学教科書から消えるにつれ、

およそ 30 年間、両者の対立は休戦状態に入っていた。しかし 1950 年代末、とくに『種の起原』100 年祭の頃から進化論関係の記述が再び教科書に登場しはじめると、両者の対立は教育委員会や公立学校を戦場として再燃したのである。また南部数州で生き延びていた反進化論州法を葬り去るため、1960 年代前半にアメリカ公民権連合は再度、訴訟を起こしている。その結果、すべての反進化論州法が廃止され、今度は進化論側が名実ともに大勝利をおさめた、と思われた。

ところが 70 年代、80 年代には、再び公立学校での進化論教育をめぐる新たな裁判がいくつか争われた。そしてとうとう 1987 年には、最高裁が公立学校の科学の時間から創造論を追放する決定を下したのである。

80 年代までの法廷では、概して進化論側が優勢だった。進化論側が被害者とみなされ、創造論側が加害者として扱われたのである。じっさい公立



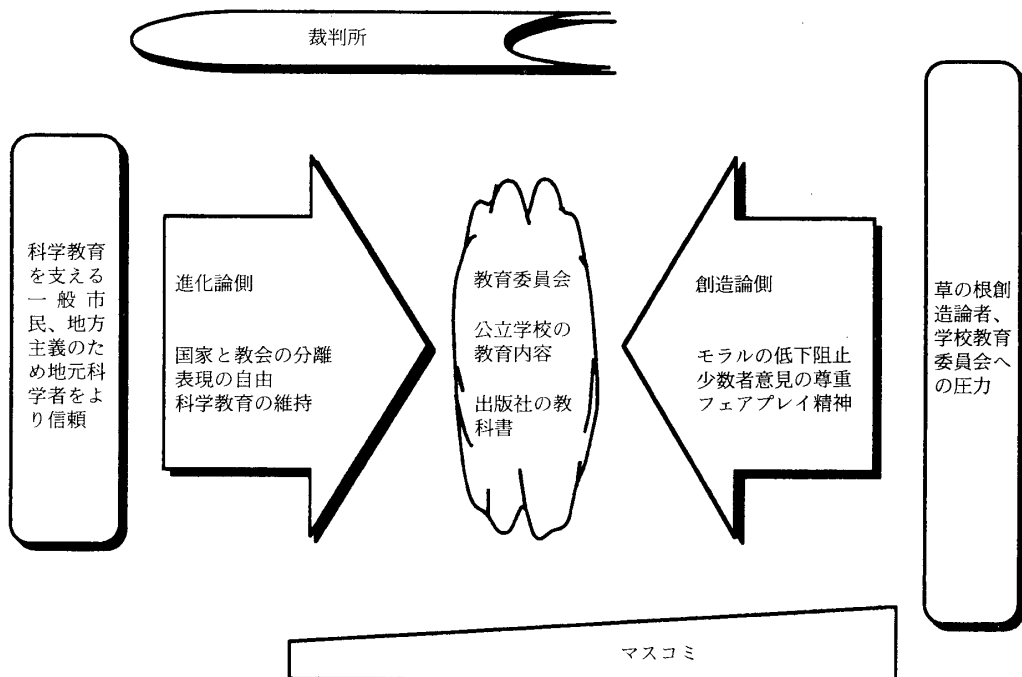
映画『インヘリット・ザ・ウィンド』のビデオ・パッケージ

学校では、創造論者の圧力のために教員が科学教育に本腰を入れられない状況が続いてきた。そこで進化論側は、①公立学校での創造論教育は「教会と国家の分離」という合衆国憲法修正条項第1条に反する、②教員としての「表現の自由」を奪われている、③「科学教育の水準」を維持できない、という3点を一貫して主張することで、法廷闘争を有利にすすめてきた。

これにたいして、創造論側は①進化論教育による子供のモラル低下、②少数者意見としての創造論の尊重、③「フェア・プレーの精神」から創造論にも進化論と同じ授業時間をさくべきだという意見を主張してきた。しかし「健全な科学教育を妨害」する加害者としての立場を変えることはできなかったのである。

その結果法廷では、「国家と教会の分離」、「表現の自由」と「科学教育の擁護」という3色旗をかざした進化論側が「モラル低下の防止」、「少数者の権利」、「フェア・プレー」を主張する創造論側を圧倒してきたのである。その背景には、冷戦さなかのスポーツニク・ショックから国力衰退が公然とささやかれたつい最近にいたるまで、アメリカがつねに科学立国を目指しそれを自認してきたという歴史がある。科学教育の水準を高めるために、あらゆる障害を取り除く必要があったのである。

ところが、90年代にはそれまでの司法の決定を無視するような事件がいくつも起きている。州立サンフランシスコ大学の事件でも、これまでの対立状況とは少し異なる様相



「創造論 vs 進化論」の対立の構図

を呈している。問題の生物学教授に「創造論教育」をやめさせて進化論教育を守るため、生物学科長はなんの躊躇もなく彼を担当コースからはずした。これにたいし、はずされた生物学教授は被害者として学科長を糾弾し、さらに告訴しようとさえした。「学問の自由」の権利だけでなく、処分にいたる「正当手続き」への権利をも否定されたというのがその理由である。この教授は大学内外の多方面から支持を受け、現在ではもとのコースに振り返り、これまで通りの内容で教えているという。

こうした結果に愕然として、「カリフォルニアは少数者意見に寛大なところだから」と、もっともらしい捨てゼリフをはく科学史家もいる。しかし今回の事件にはどうしても見過ごせない点がある。それは、これまでせいぜい高校どまりだと思われていた創造論の影響力が大学レベルにまで浸透しつつあることが実証されたという点である。

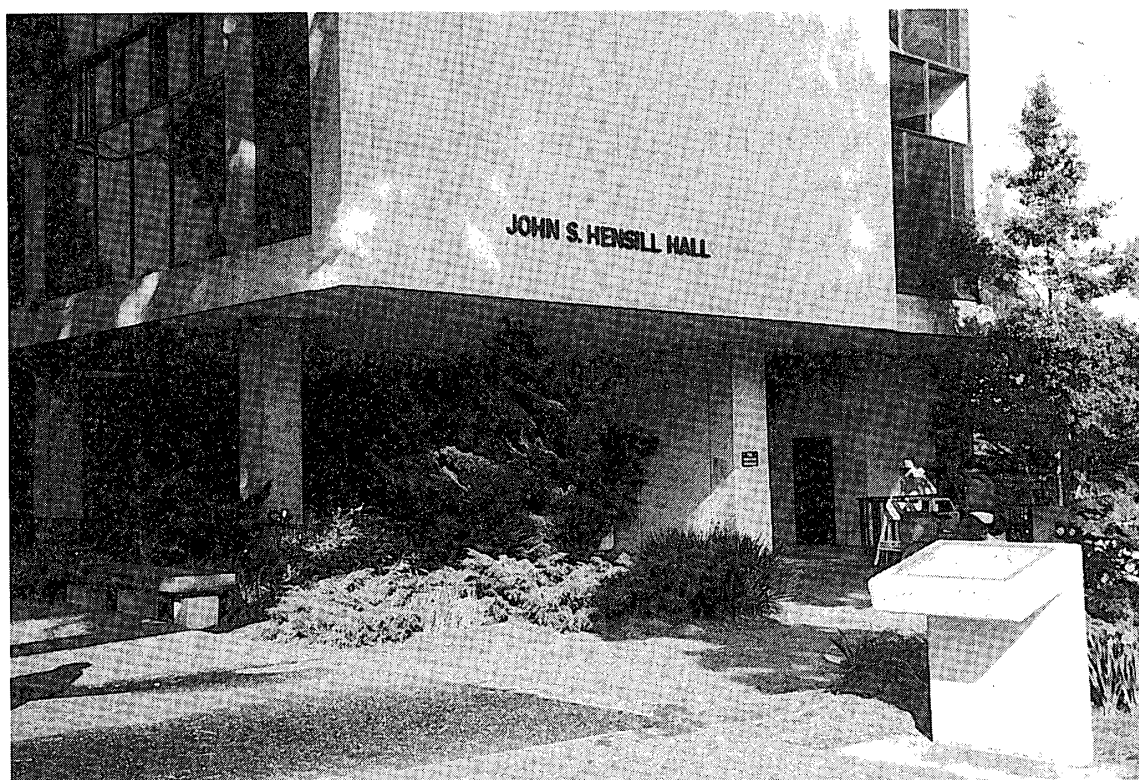
また大学の外でも創造論の影響力は大きくなっている。最近の世論調査で明らかのように、創造論支持率が異様に高くなっている。そして世論に敏感なテレビやラジオは、この変化を助長するかのように、一流企業をスポンサーに創造論関係の番組を設け視聴率をかせいでいる。

これらの点を考え合わせると、今回の事件はカリフォルニアという単なる土地柄の問題ではなく、全国的な勢力バランスが進化論側から創造論側に大きくシフトしていく前兆ではないかと考えられる。少なくとも創造論側にはこの種の事件を形勢逆転の契機にしようとする意図があるように見える。その意味で今後の成りゆきにも注目しなければならない事件である。

## 2 事件のあらまし

1992年12月初旬、州立サンフランシスコ大学ヘンシル・ホール（次項の写真参照）5階の生物学科長室を4人の学生がたずねた。彼らは1通の抗議文書を生物学科長ジョン・E・ハファニック教授（昆虫学）に手渡した。この抗議文書には「私たちが受講している生物学100の担当教授ディーン・H・ケニヨン博士について、先日前お伝えした憂慮をあらためて述べるものです」という書き出しに続き、講義への不満が具体的に表現されていた。内容は次の通りである。

- 1 生物学入門コースに非科学的な教材が含まれている
- 2 不適切な教授法
- 3 学生に対し教員にあるまじき言動をした



州立サンフランシスコ大学ヘンシル・ホール

そして、この抗議文書の最後は「私たちは教育水準の低下を認めることはできません。彼の業績調査と適切な処分を要求します」と、もっとも厳しい言葉で結ばれていた。

事件はこうして始まった。つまり、学生の悲痛な要望が発端となったのである。

問題の人物、州立サンフランシスコ大学科学部生物学科教授ディーン・H・ケニヨン博士は1977年秋学期以来「生物学100」コースとそれに付随する実験コース「生物学101」を教えてきた。いわばベテラン教授である。この「生物学100」コースは物理学・生物学分野11コースの1つで、選択必修の「入門コース」として設定されている。日本の大学でたとえれば、文系学生を対象としたかつての教養科目に相当する。人体の構造と機能、生殖、発達、遺伝、進化など、ヒトの生物学としてはオーソドックスな項目を内容としているが、「生物学専攻学生のためのものではない」という理由から、その組立については教員にかなりの自由が許されてきたらしい。

まず彼の講義内容を確認しておこう。例の学生が問題視した講義は1992年秋学期の「生物学100」全27回のうち、「第4トピック 地球上の生命の誕生」という3回分に相当する。ケニヨン教授の講義ノート<sup>11</sup>に沿って、「第4トピック」の内容を復元すると次のようになる。

10月13日

序、生物の起源にかんする最近の論争。

起源の諸側面について科学者間に論争がある。

ネオ・ダーウィニズムに異議を唱える科学者が少しずつ増えている。

最近のギャラップ調査をみると、アメリカ世論は圧倒的に創造論を支持している。

ダーウィン理論——ビーグル号航海、自然選択説、ラマルク説との比較。

起源に関する証拠研究。

比較解剖学、比較発生学、比較生物化学、化石記録、小進化の集団的研究。

進化のメカニズム（現代の視点）。

集団における変異のみなもと

突然変異、染色体構造の変化、

クロスオーバーとリコンビネーション。

遺伝的平衡、自然選択の方式、小集団における進化力、種分化。

10月15日

進化の証拠の再吟味——比較データ、化石記録、集団研究

マクロ・エボリューション

最初の生命の起源

化学的進化理論（オパーリンの仮説、ミラーの実験）から、「最初の細胞はインテリジェント・デザインを必要とした」という創造論的結論を導き出す。この結論は分子生物学、遺伝子情報、確率計算にも基づく。

10月20日

序 科学の歴史はパラダイムの対立。たとえばプトレマイオス天文学 vs コペルニクス天文学、旧創造論 vs ダーウィニズムなど。

現在でもネオ・ダーウィニズム vs ネオ・創造論の対立があり、このパターンは続く。

対立する学説の長短を批判的に調べる。

これら3回の講義では、第1に生命の起源と進化について今日の科学界では進化論者と創造論者の間に激しい論争があることを指摘し、第2に進化論では説明できない現象をとりあげ、第3に彼の「インテリジェント・デザイン」説を紹介し、この説の信奉者が増え続け、その研究も世界中ですすめられているという順序で論旨が展開されている。ケニヨン教授は、一応、「進化論をとるかインテリジェント・デザイン説をとるかは諸君の判断に

ゆだねる」と断ったらしい。しかし、このシナリオでは講義目的が進化論の否定と創造論の説得にあると判断されても仕方がない。

苦情は今回が初めてというわけではない。彼の創造論教育にたいして学生や父兄から苦情が寄せられたことは、これまでもたびたびあった。ハファニック学科長によると、各学期末の学生によるコース評価の欄に「彼のインテリジェント・デザイン・パラダイムに反対する」とコメントした者が、毎回、数人いたという。

じっさい生物学科がはじめてこの問題に直面したのは、1980年までさかのぼる。当時ケニヨン教授は「進化」というコースを担当していた。そのさいに「創造科学」を教えたことが生物学科の教授会でとりあげられたのである。結局、教授会はそのコース概要に創造論を含めるべきでないという決議を採択することで問題を処理した。

しかし数年後には再び、彼は同じ「進化」というコースの講義概要の変更を申し出た。講義内容に「インテリジェント・デザイン」説という「創造科学」を含めようとしたのである。それにたいして、当時の生物学科カリキュラム委員会は全会一致で却下するといういきさつもあった。

ケニヨン教授が創造論的見解を表明してから、生物学科では「ヒトの起源や進化」というテーマが、つねに、論争の種になってきた。学科としてはスタッフの人間関係を悪くする面倒な問題をかかえこむことになった。また創造論者がスタッフにいるという噂は、当然、生物学科の世評をいちじるしくおとしめることにもなった。そのため歴代の生物学科長は幾度となく彼に「宗教」を教えないように説得してきた。ただし説得以上の措置をとることはなく、ケニヨン自身も説得のたびにしばらくは自粛したので、正教授の地位を危うくするようなことは一度もなかったという。

こうした経緯を踏まえると、今回、この問題の再燃にハファニック学科長が「またやったか、もう我慢できない」と思ったとしても無理はない。これまでの教授会の反対決議をまったく意に介さないケニヨン教授にはさぞかしうんざりしたことだろう。

ハファニック学科長はただちに創造論言及の禁止命令を出した。しかしそれがケニヨン教授に拒否されると、ジェームズ・C・ケリー科学部長と相談のうえ春学期のスケジュールを変更し、彼の入門コースを別の教員に担当させる方針を一方的に決定した。そして1993年1月初頭、その旨をケニヨン教授に伝えたのである。

しかし、こういう人事にかかわる処分は軽々しく決めることのできないものである。その決定にはことのほか慎重な手続きが要求される。それを簡単な事情聴取だけで済ませたハファニックは、学科長として落ち度があったといわれてもしかたないだろう。生物学科の教育にとって最善の決断だと思われた処分が、のちに、学部長や学科長を思いがけない



窮地に追い込むことになる。

1993年1月中頃、ケニヨン教授は州立サンフランシスコ大学「学問の自由」委員会にこの処分の調査を依頼し、自分を「生物学100」コースに戻すための勧告を行うよう要請した。ハファニック学科長の方針決定を「学問の自由」の権利および「正当手続き」への権利にたいする明らかな侵害として訴えたのである。同委員会への働きかけはあたかも予定された行動であるかのようにスムーズに運ばれた。その後の事件の展開を考えると、彼もまたこれまでの「孤独な闘い」から有効な自己防衛手段を身につけていたのかもしれない。

「学問の自由」委員会は即座にこの問題の調査を決定し、およそ5カ月間の調査を経て、6月初めに結論を出している。その報告書は次のとおりである<sup>iii</sup>。

まずケニヨン教授の講義について述べている。第1に、彼が講義中に創造論を「正しい理論」として教えたと断定するに十分な証拠は見つからなかった。彼の講義内容とは反対に、コース・シラバスにはキリスト教関連の文献が一切ふくまれていない。また、1992年秋学期の中間試験の「ヒトの起源と発達」にかんする諸学説を問う質問内容は、基本的に、どちらかの見解を強要するものではない。生物学科が問題視したギャラップ調査（次項参照）のとりあげ方（「アメリカ人の半分はヒト起源について非科学的説明を受けいれている」）についても、州立の高等教育機関で創造論にかんする情報をとりあげることがはさして珍しいことではない。むしろ、とりあげること自体に本質的な誤りはなにもない、と委員会は判断したのである。

第2に、ケニヨン教授が授業で学生の反論を許さなかったという指摘については、これも証拠がないと断ったうえで、教育方法研究センターの指導を受け、学生からの反論をあつかう方法や学生の権利をも重んじる方法を早急に修得するよう勧告している。

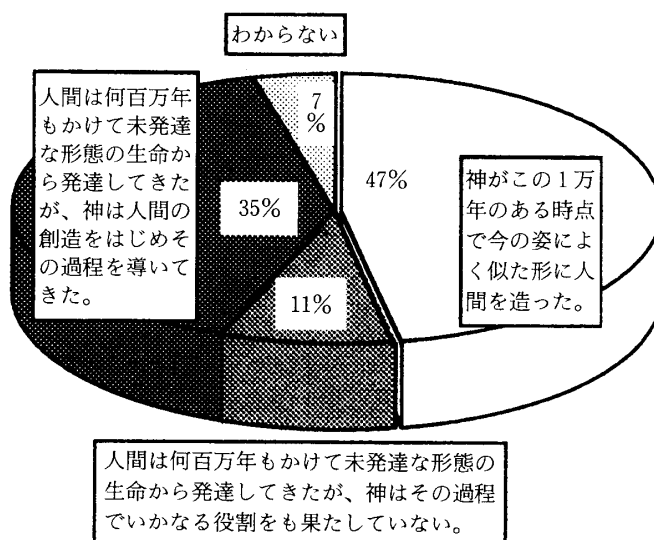
第3に、州立サンフランシスコ大学の「学問の自由にかんする指針<sup>iv</sup>」によると、カリキュラムの最終決定は学科ではなく、個々の教員にまかされている。したがって、たとえ個々の教員のカリキュラムが学科全体の目標に合致しなくとも、教育内容や判断力や態度に異常が認められないかぎり、カリキュラムの最終決定権をもつのはあくまでも個々の教員である、と同委員会は判断した。さもなければ無制限の思想統制に直面したとき、テニユアーという終身雇用制度が保護者の機能をはたせなくなってしまうからだ。

#### ギャラップ調査（1993年）

「次の3つのうち宗教とヒトの発達についてあなたの見解にもっとも近いものを選んでください」

- ① 神がこの1万年のある時点で現在の姿によく似た形で人間を造った。

- ② 人間は何百万年もかけて未発達な生命の形態から発達してきたが、神は人間の発達をはじめその過程を導いてきた。
- ③ 人間は何百万年もかけて未発達な生命の形態から発達してきたが、神はその過程でいかなる役割もはたしていない。
- ④ わからない。



以上の調査結果に基づき、「学問の自由」委員会は次のような見解を示した。

- 1 ケニヨン教授を担当コースからはずすという決定は、「正当手続き」という点からみて不適切である。
- 2 ケニヨン教授の講義と思想の実質がハファニック学科長やケリー学部長をはじめとする同僚にとって不愉快なものであるとしても、「学問の自由」の原則によりケニヨン教授には教える主題についてあい反する見解を提示する権利が与えられている。
- 3 教授個人の見解とカリキュラムの優先順位との対立は学科の教授組織によって解決されるべきである。

彼の講義に創造論教育の確固たる証拠がない以上、ケニヨン教授が自分の思想を教育する権利を主張すれば、同委員会にはそれに反対する理由がない。それは政教分離という憲法上の原則にも抵触しない。また州立サンフランシスコ大学が特定の宗教を是認することにもならない。この問題はあくまでも合衆国憲法で保証されている「学問の自由」にかかわるものであって、専門教育の水準や能力を問うものではないというのが、「学問の自由」委員会の基本的姿勢だった。

報告書は「思想統制や思想弾圧を断じて許さないこそ大学の使命である」と結び、最後に次の2点を生物学科に勧告している。

- 1 生物学科はケニヨン教授を「生物学 100」コース担当へ戻すこと。
- 2 科学部はヒトの起源と進化にかんする意見の相違から生まれる緊張は近い将来に消えることはないし、それどころかますます増大していくという見通しに立たなければならない。信仰の深さとこの問題がひき起こす感情の強さを考えると、科学部はすべての見解と権利を守るための集団的かつ公的な解答、つまり、非生産的な対立や研究活動の破壊を最小にする公式の解答を用意すべきである。

このように「学問の自由」委員会は「表現の自由」や「正当手続き」への権利の侵害を根拠として、ケニヨン教授支持の結論を引き出している。しかし同時に、彼の主張を無条件に認めれば「公立学校での宗教教育」を許すことになるかもしれない。勧告には同委員会がこの懸念を捨てきれなかったところがある。

それでもケニヨン教授支持を打ち出したのはなぜだろうか。ひとつには、創造論教育に同情するメンバーが同委員会の過半数を占めていたという点あげられる。これは、各地の学校教育委員会で創造論支持の委員が過半数を占めればその教育委員会が創造論教育支持にまわるのと同じ構図である。

また「学問の自由」委員会のメンバー構成にはもう1つ問題点がある。委員長は英文学者（女性）であるし、報告書の署名には委員長ほか図書館員、栄養学教授、放送コミュニケーション教授、社会福祉教授の名があるだけで、自然科学者の署名はまったく見あたらない。要するにメンバー構成から見ると、同委員会には生物学という専門教育の水準を云々する能力がなかったとってよい。

一方ハファニック学科長にしてみれば、そもそもメンバー構成に疑問がもたれるような委員会の勧告を黙って受け入れることなどありえなかった。ハファニック学科長やケリー科学部長は、「科学の講義では、学生は学界で認められた見解を学ぶ権利をもつ」という理由で、同委員会の勧告にしたがうつもりはないと表明した。

ところがこの態度硬化が彼らをいつそう窮地に追い込むことになる。なにしろそれは大胆にも「学問の自由」という大原則に異議を唱えたと受け取られかねない態度だったからだ。もし生物学科がおとなしく勧告にしたがっていれば、この時点で一件落着となったかもしれない。しかしそんな気配はまったくなかった。このあと、事件は大学内外の勢力をも巻き込み、クライマックスを迎えることになる。

### 3 ケニヨン教授とその理論

ディーン・H・ケニヨン（次項の写真参照）は1939年カリフォルニア州生まれである。グレイの髪が薄くなり、銀縁の厚い眼鏡をかけ、アメリカ人男性としては並みの体格にツイードのブレザーをまとっていた。物静かというより精気がなく、話していると実際より老けて見える。せまい研究室には古いタイプのマッキントッシュが1台あるだけで、研究室というよりは休憩室という感じだった。ラディカルなファンダメンタリストのイメージからはほど遠く、自分のことを敬虔なカトリックだとおだやかに話してくれた。

彼はシカゴ大学で物理学の学士号、そのあとスタンフォード大学で生物物理学 (Biophysics) 学位をとり、オックスフォード大学、NASA、カリフォルニア大学バークレー校でポスト・ドクトラル研究員を務めた。1966年に州立サンフランシスコ大学に（助教授として）奉職し、1974年には正教授に昇進している。その間1969年には共著者として *Biochemical Predestination* という題の本を出版している。この本は「原始スープ」と呼ばれる化学物質から最初の細胞がいかにかに形成されたかを説明した先駆的な理論書であった。この時点で彼は、化学進化論と生命起源の科学的研究の権威をめざして順調な経歴を歩むかのようだった。

ところが1970年代にはいると、彼の研究は行き詰まった。生命の起源をシミュレートするように設定した実験を何度くりかえしても、ごく少量のアミノ酸が生じるだけで、残りはゴミに等しいものだった。そういう失敗が続いた。

他方、分子生物学はDNAにはコード化された複雑な情報が大量に存在することを明らかにしつつあった。単なる偶然だけで化学物質が高度に複雑な分子に構成される可能性は統計的にきわめて小さいこともわかってきた。はたして生命の起源は自然法則だけで説明できるのだろうか。研究すればするほどケニヨンは自分の考えに疑問をいだくようになった。彼は1人で悩み続けるしかなかったという。

そしてとうとう、1つの結論に達した。「おそらくインテリジェンスをもつ指導者がある役割を果たしたにちがいない」と。これが彼の「インテリジェント・デザイン」説の出発点である。

1981年、ケニヨンは「ビル・マックローリン牧師ほか vs アーカンソー州教育委員会ほか」裁判で、被告側から証言台にあがった。マスコミ注視の舞台上、神の創造を支持する「科学的」証拠を公然と発表し、大学の自然科学系の学部にも創造論教員がいることをはなばなく全国にアピールした。このときから彼はカミング・アウトした創造論者として第二の人生を歩み始めたのである。



研究室のディーン・ケニヨン教授

それからはキャンパス紙や講演で堂々と自分の見解を唱え続けた。要するに彼の「背信」はキャンパス内の「公然の秘密」となったのである。教室での創造論教育もこの頃からすでに始まっていたかもしれない。

さて、ケニヨンの「インテリジェント・デザイン」説とはいったいどのような理論だろうか。

名称こそ目新しいが、中味は伝統的な特殊創造説そのものである。古くは1802年、イギリスの神学者ウィリアム・ペイリーがまったく同じアイデアを述べている。時計が落ちていれば、必ずそれを造った時計職人がいる。それと同じ理屈で、脊椎動物の眼のように複雑な構造物があれば、やはりそれを造ったデザイナーがいるにちがいないと、ペイリーは推論した。要するに、生物がもつ複雑な構造は神の存在を証明しているという考えである。

ケニヨンの「インテリジェント・デザイン」説もペイリーの考え方にそっくりである。緻密な構造をもつ自然は複雑な設計図に基づいている。その設計図が偶然にできたとは考えられないので、設計者としての創造主がいるにちがいないと主張する。ペイリーとの違いがいくらかあるとすれば、分子生物学により解明されたDNAの複雑性や情報理論によるその偶然的生成の確率の低さなど、現代科学の成果を引き合いに出すことだけであろう。

ただし、この違いは創造論者を分類するときの重要なポイントとなる。まず、聖書の文献学的研究に専念する伝統的タイプの創造論者がいる。彼らとは別に、1960年代中頃から旧約聖書の「創世記」の記述を「科学的」方法で証明しようとする人々があらわれた。彼らは自然科学の博士号をもつことから「創造科学者」と呼ばれ、神による6日間の創造、ノアの洪水・箱船の痕跡をじっさいの地層、化石のなかに探そうとする。

さらに伝統的創造論者と科学創造論者はそれぞれ次の2タイプに分かれる。1つは創造の6日間の1日を文字どおり24時間の1日だと解釈するヤング・アース派である。彼らは進化だけでなく進化にかかる長大な時間をも認めない。地球の歴史はせいぜい数千年だと考えている。また「ノアの洪水」を実証しようとするだけでなく、カリフォルニア州サンティエー市の創造研究所のように、「ノアの箱船」の痕跡を求めてトルコのアララト山に探検隊を派遣することもある。こうした旧約聖書の記述を字義通り科学として主張するため、ヤング・アース派の創造科学者は大学内で進化論者と共存することはほとんどできない。一般に、創造科学者にはヤング・アース派が多い。

もう1つは、創造の1日に地質年代に相当する時間を認めるオールド・アース派である。彼らは地球の歴史に長い時間を認め、なかには神による最初の生命の創造の後ならば、神の支配のもとでの進化さえ認める者もいる。一般に、彼らの主張には「創造主の存在」を肯定する点では絶対に妥協することはないが、その他の細部にはあまりこだわらないという傾向がある。したがってオールド・アース派の創造科学者はおとなしくさえしていれば、大学内で進化論者と共存することもむずかしくない。

意外なことに、ケニヨンはこのオールド・アース派に属している。つまり、本来なら目立たずに教鞭を執っていたかもしれない。にもかかわらずたびたび騒ぎを起こすのはなぜだろうか。オールド・アース派には大学内で存在しやすいかわりに、目立たないし世間の知名度も低いという難点がある。したがって彼が騒ぎを起こす狙いは、自分の存在をアピールすることだと考えることもできる。「インテリジェント・デザイン」説という新しいネーミングまで用いるのも、そのためかもしれない。

#### 4 問題の拡大

さて、ハファニック生物学科長に「学問の自由」委員会の勧告にしたがう意志がないことを知るや、すかさずケニヨン教授は次の手をうった。1993年8月初旬、州立サンフランシスコ大学評議委員会（Academic Senate）の議長にこの件を訴えてたのである。もし同学科長の非妥協的態度が許されるならば、州立サンフランシスコ大学の「学問の自由」に

先例のない汚点をのこすことになるだろう。これを憂慮するとともに彼の「学問の自由」の権利の完全回復を要求して、評議委員会にこの件の再調査を求めたというわけである。

さらにケニヨン教授はアメリカ大学教員協会 (AAUP, 在ワシントン DC) の副幹事ジョナサン・ナイトにも同じ要求を出していたという。その甲斐あって、11月初旬、ナイトは文書で科学部長ケリーと生物学科長ハファニックに連絡を求めてきた。その内容は、同協会は州立サンフランシスコ大学での事件経過とケニヨン教授が依然として生物学 100 コースに戻されていないことを知り、生物学科が学問の自由委員会の勧告を尊重し、早急にそれにしたがうよう強く希望する、というものだった。

アメリカ大学教員協会とはアメリカ各地の大学で「学問の自由」の権利への侵害がないかどうかを監視するための全国組織である。これまで同協会は必ずしも創造論教育に賛成してこなかった。たとえば 1981 年の年次総会で、AAUP は「公立学校で創造科学と進化論の均等な扱い」を要求したアーカンソー州法に反対する決議を採択したことがある。しかし今回、同協会幹部の 1 人がケニヨン支持を表明したことは、同協会にも創造論の影響力が浸透しつつあり、この問題については同協会が一枚岩ではないことを示している。

こうして AAUP を味方につけたことで、ケニヨン教授はハファニック学科長をさらに一歩追いつめたことになる。それだけではない。「学問の自由」の権利を盾に、州立サンフランシスコ大学全体に圧力をかけ始めたことにもなる。これまでのところ自分から法的手段をとっていないが、彼はすでに弁護士に相談しているという噂もたち始めた。いずれにせよ、訴訟となれば、州立サンフランシスコ大学にとってきわめて面倒な事態が生じるだろう。大学当局にとって「学問の自由」をめぐる訴訟ほど高くつくものはない。一説によると、この種の裁判には数十万ドルの訴訟費用がかかるという。

また、AAUP からの要請には拘束力はないものの、脅迫めいた強制力があるのも確かである。書面では調停を試みると言ってきただけだが、したがわなければ「学問の自由」を侵害した学校名のブラックリストに州立サンフランシスコ大学の名前を載せるのは必至である。AAUP がそのリストを全国に配布すれば、大学の名声に致命的な傷がつくことになるは明らかだった。

さすがに AAUP からの要請を無視することだけではできず、11 月中旬、ハファニック学科長はジョナサン・ナイトに返書を出している。そのなかで、①コース担当の変更は「学問の水準」を維持するためであること、②その変更は生物学科のカリキュラム委員会で決定されていること、③ケニヨン教授には別の大学院セミナーを用意し、彼自身の見解を議論できる機会を設けたことを伝えた。つまり、ケニヨン教授に別のクラスを担当させるという現実的な解決策で、「学問の自由」委員会の勧告を真摯に受けとめたことを示そうとした

のである。

ついに妥協し始めたハファニック学科長に追い打ちをかけるかのように、ケニヨン教授は生物学科の同僚に手紙を出し、自分の支持にまわるよう呼びかけた。第1に、1993年の夏期学校以来「生物学100」からはずされているため、「学問の自由」と「正当手続き」への権利は侵害され続けている。第2に、別のコースが用意されても「正当手続き」への権利が遡及的に解決されることはない。あくまでも「生物学100」への復帰がないかぎり、自分の「学問の自由」の権利は回復されない。第3に、講義では進化論を基本的見解として教えたうえでその批判と別の理論を紹介しているのだから、州立サンフランシスコ大学の「学問の自由の指針」に反していない。第4に、教員の講義内容は学科全体で決めるべきだというハファニックとケリーの意見では、それぞれの教員の「学問の自由」は保証されない。そして、学科の同僚にたいし「よく考えた方がよい。これはとても重要な問題だ。危険な先例がもうけられようように注意しよう」と警告した。

12月6日、ついにこの事件は全国紙で報道された。『ウォールストリート・ジャーナル』(Page A-14)で、ウィットワース・カレッジ(在ワシントン州スポケイン)の科学史・科学哲学教授スティーブン・C・マイヤーがケニヨンを支持した評論を掲載したのである。彼はまずケニヨン教授を「化学進化論および生命の起源の科学的研究の権威」として紹介し、事件の経過を簡単に説明した後、この事件の不愉快きわまりない点として次のように全国の読者に訴えた。

第1にケニヨン教授の説明を「宗教的」だと決めつけ、唯物論的な説明(進化論のこと)に「科学的」だというレッテルを貼るのはおかしい。なぜなら、ケニヨン教授が用いる方法論や推論は「転向」以前と同じである。ただ結論が変わっただけだ。第2に、進化論においては、証拠にじゅうぶんな証明能力がない場合でも、多くの研究者たちが進化論を厳格に唯物論的な説明方法だと主張している。これはルールのおしつけによる反論の抑圧である。さらに、州立サンフランシスコ大学の「学問の自由」委員会がこの夏、同大学の指針にしたがいケニヨン支持の結論を出したことを讃え、ハファニック学科長とケリー学部長のかたくなな態度を非難し、ケニヨン教授にたいする生物学科の処置は、「まさにアメリカの学界における有神論的教員への弾圧」である、とマイヤーは締めくくった。

このマイヤー評論にたいし即刻、進化論側からの反論が開始された。それらは12月15日、同じく『ウォールストリート・ジャーナル』紙の投書欄に掲載された。

全国科学教育センター(在カリフォルニア州バークレー)所長ユージニー・スコット博士(次頁の写真参照)は次のように反論している。マイヤー論文には科学、学問の自由、「創造論 vs 進化論」論争について重大な誤解がある。第1に、生命は自然に生まれるのか、



超自然に生まれるかという問題について、科学は唯物論的な説明のみを扱う。それにたいし、ケニヨン教授の「インテリジェント・デザイン」説はまさに宗教であり、科学ではない。今日たとえ生命の起源にかかわるすべての段階についての知識が十分でないとしても、超自然的説明へ飛躍してよいということにもならないし、進化が起きなかったという結論にもならないはずである。

第2に、「学問の自由」には「学問の責任」がともなう。その第1の責任は学生にたいするものである。彼らは自分が契約したものを学ぶ権利をもつ。生物学の授業で学生が学ぶのは、神学ではなく正式な生物学である。一般大衆の反応とは関係なく、進化は生物学の根本原理であり、それが起こらなかったと教えることは地球が平だと教えることと同じである。ケニヨン教授に標準的な生物学を教えるよう要求することは彼の「学問の自由」の侵害ではない。彼が新入生コースでカリキュラム内容を制限されるのは、新入生には彼の考えがなぜ誤っているかを理解するだけの用意がないと思われるからである。

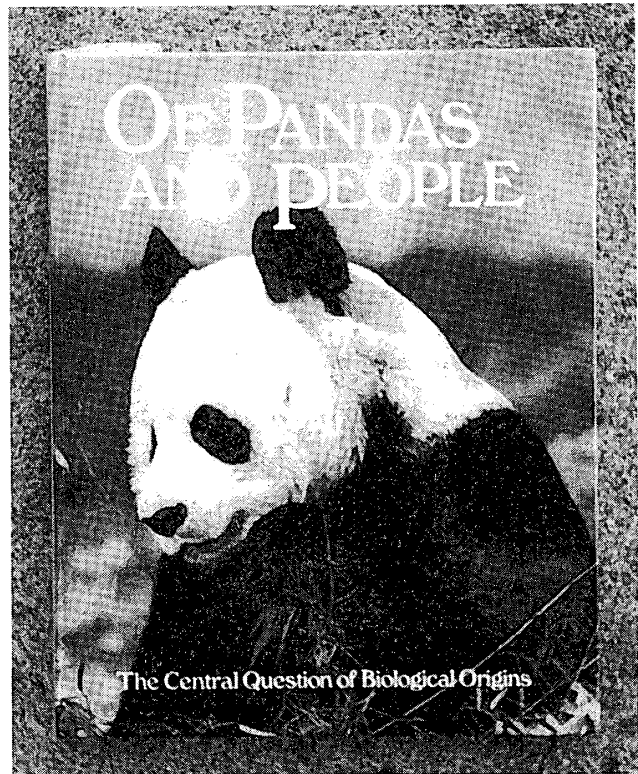
第3に、ケニヨン教授が教えていることは、彼の教科書『パンダとヒトについて *Of Pandas and people: The Central Question of Biological Origins* (次項上の写真参照)』に書かれているような進化論である。それは「インテリジェント・デザイン」説という宗教的発想に基づくいわゆる「創造科学」である。そのなかには明白な間違いがいくつかあ



オフィスのユージー・スコット博士

る。たとえば、「2人の完全に雑種の個人からありとあらゆる皮膚の色を示す子孫が生まれるだろう」という記述があるが、これは溜息が出るほど遺伝学を知らないコメントである。彼の場合、これはヒトのいろいろな肌の色がノアとその家族から生じたことの「科学的」説明となっている、と。

大学の専門家からの投書も掲載された。カリフォルニア大学バークレー校の総合生物学科教授トーマス・H・ジュークスは、次のようにマイヤー評論を批判している。マイヤーはケニヨン教授を「進化論の認められた専門家」だとか、「世界的な科学者」だとか褒めそやしているが、彼は16年前にレ



『パンダとヒト』の表紙

ビューつきの雑誌への投稿をやめた人物で、そのときから「インテリジェント・デザイン」説という生物学の宗教的概念にとりつかれている。また、州立サンディエゴ大学の生物学科助教授ウィリアム・スウェイツ博士（次項の写真参照）は、彼の「インテリジェント・デザイン」説は18世紀にしか通用しない仮説であり、生物学入門コースに登録する学生が学ばなければならないのは、200年も前の古い宗教ではなく、生物学の現代的視点である、と強調している。

同紙の投書欄ではこの問題についての論争がこのあとしばらく続いた。どういうわけか、投書欄の編集方針に創造論よりの傾向があるのか、ケニヨン教授を支持する投書が多く目につく。ここでも、創造論側主導で論争が展開されたようで、進化論側の対応は、創造論側に偏らないようバランスをとるだけで精いっぱいだった、という印象をのこした。

## 5 事件の顛末

『ウォールストリート・ジャーナル』紙に載ることで、この事件は全国的に知られるところとなった。しかも科学教育の内容や水準の問題というより、むしろ「学問の自由」の問題として報道されてしまったのである。これで、大学側は少なくとも「学問の自由」を侵



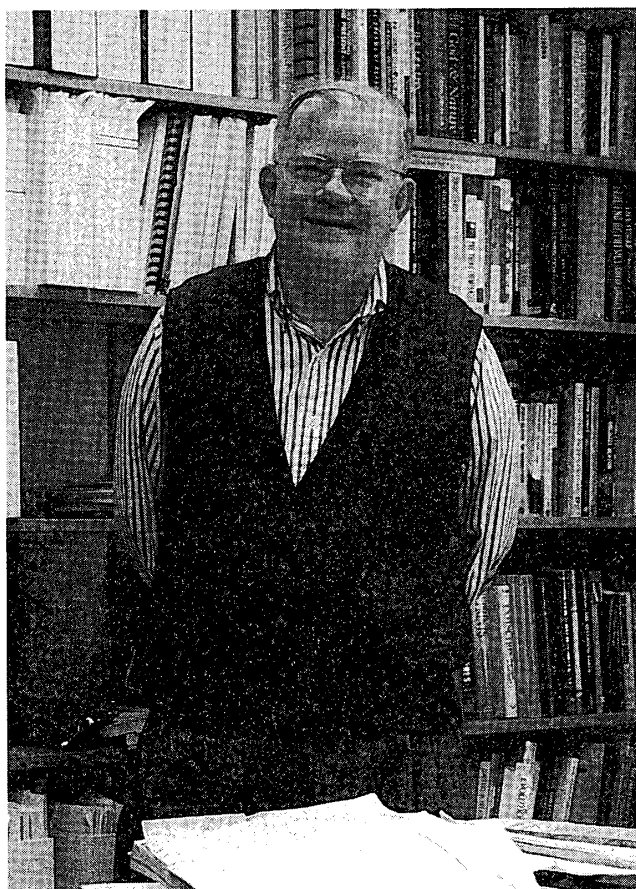
ウィリアム・スウェイツ博士夫妻

害した大学という汚名だけは避けなければならなくなった。実際、マイヤー論文掲載の翌日(12月7日)大学評議委員会は賛成25, 反対8, 棄権3でケリー学部長とハファニック学科長にケニヨン教授を1993年夏期からはずされている生物学の入門コースにもどすよう要求する決議をしたのである。

創造論側はすかさず、『ウォールストリート・ジャーナル』紙の投書欄で評議委員会が「学問の自由」を尊重する決定をしたことを全国に伝えた。この投書の主は、カリフォルニア大学バークレー校法学部フィリップ・ジョンソン教授(犯罪法の専門家、次頁の写真参照)である。事件発生直後からケニヨン教授を応援してきたといわれる人物である。「学科長や学部長が辞任するかどうかはこれからのことである。彼らは他の科学者同様、進化生物学を支配する哲学的唯物論を疑う人間には学問の自由はいらないと主張している」と述べ、ハファニックやケリーを非難した。その論調にはあたかも創造論側の勝利宣言のような印象がある。

確かに、州立サンフランシスコ大学評議委員会はケニヨン教授の訴えを認め彼をもとのコースにもどす決議をした。しかし彼に進化論を否定し創造論を教育する権利を認めただけではない。

じっさい同委員会議長ゲイリー・ハマーストロムは新聞インタビューに応じて、次のように語った。「我々は創造論が生物学の講義で教えられるべきだという見解をとったのでは



研究室のフィリップ・ジョンソン教授

ない。ケニヨン教授が、学問上、正当手続きへの権利を否定されたという見解をとっている。学生からの批判を裏書きする証拠はみつかっていないし、彼の講義内容が他の教員によって確認されたわけでもない。つまり、講義内容の調査はまったく行われていなかったのだ」と。要するに、評議委員会が生物学科の処置に反対する理由は、その手続きについてのみであると弁明したのである。

したがって評決にいたる過程で、同委員会は「講義名と講義内容の一致・不一致」という問題についてまったく議論を詰めていない。まして「科学の講義で何を教えるべきか」という問題については、委員のあいだに共通の理解すらできなかったという。たとえば

ある文系の講師は新聞インタビューに応じて、「もし自分の講義について同じことが起こると考えると、我々自身の学問の自由の喪失としてこの問題をとらえなければならない」と述べている。そもそも「講義名とその内容の適切さ」という点からこの問題をとらえようとする発想がみられない。とくに教養系の委員にはこの問題を「学問の自由」の権利の侵害としてのみとらえる傾向が強く、科学系の委員との間に大きな溝があったという。

同評議委員会には生物学科の決定を覆すだけの権限はないが、ケリー科学部長とハファニック生物学科長はこの時点で引き下がることにした。ケニヨン教授のコース復帰を認めたのである。

しかしケリー学部長は依然として、「我々は何が科学で何が科学でないかという基本原則を崩してまで評議委員会に迎合するつもりは毛頭ない」と強気の構えを見せている。またハファニック学科長は「我々は彼が講義で何を教えるか、これからも徹底的に調査するだろう」と述べ、この問題がまだ終わっていないことを強調した。

じっさい、私のサンフランシスコ滞在中2月18日に、生物学科教授会は「適切なカリキュラム基準を支持する決議」を圧倒的賛成27(反対5、棄権2)で採択した。それによると、

「生物学科は学問の自由を尊重し、適切な場所で見解を表現する学科教員の権利を支持するが、生物学科は学問の最高水準の維持と教室で提示される教材の正確さにたいして責任をもつ。しかるに、インテリジェント・デザインを支持する科学的証拠はまったくない。したがって、我々はインテリジェント・デザイン説は科学的でない」と決議しなければならない」となっている。

他方、ケニヨン教授は新聞インタビューに「評議委員会の結論にとても満足している」と述べたあと、「同委員会で認められた以上、講義内容を変更するつもりはまったくない」と平然と答えている。とはいえ、これからは講義内容について当然慎重になるになるだろう。生物学科としてもそう簡単に彼のシッポをつかむことはできないことが予想される。

私はその後の経過をハファニック学科長にたずねたことがある。1995年6月2日付けの彼からの電子メールは次のように書かれていた。「現在、私たちの学科は冷却期間にあるようだ。ケニヨン博士は生物学100を担当しているが、宗教的な見解の提示にはかなり慎重になっているらしい。学生から新たな不満は出ていない。今のところ、平穏無事にみえるが、この問題が完全にかたづいたとは思っていない」と。

結局、大学側の決定は学問の自由を尊重し、同時に「創造論 vs 進化論」論争にもまきこまれないという苦心の末の選択を表している。キャンパスを「創造論 vs 進化論」論争の戦場にしたいくないという気持ちが大学当局に強く働いていたのは確かだ。ハファニック学科長の処置を支持すれば「学問の自由」の権利の侵害を容認すると思われることになるし、ケニヨン教授を全面的に支持すれば公立学校での創造論教育を容認することになる。いずれにしても憲法上のタブーに抵触するし、大学の世評も落としかねないという状況で、非常に苦しい選択を迫られたわけである。

身動きのとれないなか、大学当局は創造論教育の確固たる証拠がないと判断し、まずこの問題が「政教分離」の原則や「創造論 vs 進化論」論争とは無関係であるという一種の境界線を引いた。そして、証拠のないままに担当コースからはずされたケニヨン教授は「正当手続き」への権利を侵害されていると判断し、ケニヨン教授の「冤罪」をはらすことにした。こういう理由で彼の担当コースへの復帰を支持したのだから、大学当局は問題のすりかえにより「事勿れ主義」に徹したといわれてもしかたない。要するに、本来の問題をまったく解決しないという「解決なき解決」であった。

## 6 今回の事件の意味

もちろん、この事件は「創造論 vs 進化論」論争という歴史的な対立の流れのなかにある。

勝つときもあれば負けるときもあるというような小競り合いの1つだったといえるかもしれない。

しかし事件の経過を振り返ると、これまでの傾向とは少し異なる点がある。つまり、学外団体からの圧力の使い方やマスコミへのリークのタイミングなど、創造論側の戦法には巧さがひかり、反対に進化論側の対応には稚拙さが目立った。またその結果、創造論側が勝ち、ケニヨン教授が担当コースに復帰しこれまで通りの教育を続けることになった。この種の他の事件と比べると、こうした過程や結末には近年の傾向に逆行するものがみられるのである。

それだけではない。ケニヨン教授の入門コース復帰に反対することで創造論教育を阻止しようとしていた生物学科が、皮肉なことに、彼の思想を教える場として大学院レベルのゼミを提供した。いわゆる交換条件だったかもしれない。ところが、この提案により生物学科は同大学での創造論教育の道を正式に開いたことになる。「学問の自由」の権利に気を配るあまり、「政教分離」の原則をみずから放棄し、生物学科は「宿敵」に学内での「布教」手段を公認した。交換の代償としてはあまりに寛大すぎたかもしれない。

このように事件の過程で「学問の自由」を盾にした創造論側につけ込まれ、生物学科自身が意外な譲歩を与えてしまった。これこそ、創造論側の最大の収穫であり、今回の事件の結末が他の場合ときわめて異なる点である。

じっさい1987年の最高裁判決でルイジアナ州の州法だった「授業時間均等化法」が違憲判決を受けて以来、憲法のもとでは公立学校の科学の時間内の創造論教育は認められないというのが常識となっていた。進化論側は少なくとも法廷のなかでは有利に立ち、大学内でも堂々と「異端者を迫害」できる環境にあった。たとえば1987年に同じような事件がアラバマ大学で起きたときにも、司法は1991年に創造論の教授からの訴えを退けている。

したがって、アメリカの大学は創造論者にとってかなり居心地の悪い場所になっていたはずである。もともと、アメリカ科学界では宗教にたいして「不寛容、過剰防衛」の姿勢がそうとう根強い。創造論者の教員や学生の眼から見れば、大学における「ハラスメント」として映るようなできごとはこれまでたくさんあっただろう。「いやがらせ」は口をきかないという日常的なことから始まり、誹謗中傷、脅迫、大学院プログラムからの締め出し、学位授与の拒絶、昇進の拒否、罷免にいたる。それでも裁判になれば、創造論者にあまり勝算がなかったというのが近年の実状だった。

少数者意見を尊重し、すべての人に言論・学問・信教の自由を保証するはずのアメリカが、おそらく、彼らにだけはそれを認めず、むしろ「差別」を正当化してきたともいえる。「少数派だった頃、表現の自由を唱えていた進化論者は勝者になったとたん、反対者にまっ

たく自由を認めなくなった」と皮肉を言う創造論者もいる。それほど、教育界における「創造論 vs 進化論論争」は進化論側に有利な雰囲気だったのである。

こうした雰囲気に慢心したのか、アメリカの大学では進化論側に一種おごりに近いような油断があった。科学の時間に創造論教育が行われることがあるとしても、それはしょせん高校までの話であり、大学の科学教育で創造論者が公然と創造論教育を実施できるはずがないと、多くの関係者が安心しきっていた。しかし、今回の事件でその安心感は多少崩れることになるだろう。なにしろ公立大学の生物学科で創造論教育の道が開かれたのだから。

さらに今回の事件にはもう1つ重要な論点が見えかくれしている。それは、論争の過程で「公立学校での創造論教育は憲法上認められない」という法的根拠が「学問の自由」という大義名分の前に封殺され、進化論側のためにまったく役立たなかったという点である。もちろん、「学問の自由」の権利はどちらにとっても味方にもなれば敵にもなる。本来それは「創造論 vs 進化論」論争の本質とは無関係の原理のはずである。にもかかわらず今回の事件の結末には、どうしても、「学問の自由」の権利が創造論教育を認めたかのような印象が付きまとうのである。

生物学科の処置を教員にたいする「学問の自由」の権利の侵害と判断した評議委員会の決定は、あくまでもケニヨン教授に創造論教育の証拠がなかったという前提に立つものである。しかし彼の創造論者としてのイメージがきわめて強いため、彼の「学問の自由」の権利の侵害は、創造論者の「学問の自由」の否定として錯覚される可能性があったことも確かである。つまり、問題の設定に創造論者の「学問の自由」の権利の回復と創造論教育の是認とが表裏一体となるような条件があったのである。創造論側にこの錯覚を積極的に利用しようとする意図的な戦略があったかどうかはわからないが、『ウォールストリート・ジャーナル』の投書欄を読んだ人はついついこの錯覚に陥ってしまったのではないだろうか。

しかし言うまでもなく、教員に認められる「学問の自由」の権利はケニヨン教授の創造論教育を認めるはずはない。そもそも「学問の自由」の権利は、講義内容に無制限の自由を与えるわけではない。化学と称して錬金術を教えることはできないし、生物学と称して旧約聖書の創世記を教えることも許されない。また「政教分離」の原則から判断すれば、やはり公立学校では特定の宗教を助長するような教育は禁止されている。

さらに、講義内容は受講する学生の学力や判断力にも左右される。たとえば遺伝学の入門コースで「植物の獲得形質は遺伝する」というルイセンコ説を正しいと教えたり、現代史の入門コースで「ホロコーストや南京虐殺はまったくの作り話だ」と教えることは適切



とは言えない。まだ判断力の十分でない学生は、反論のための知識がなく、教えられた通り信じるほかないからである。

また、「学問の自由」を制限するものとして履修要覧や講義シラバスなどもあげられる。これらの教育目標をかかげた公式の出版物には、講義の中味を制限する効力がある。当然、生物学科はそうした出版物のなかで進化論をはじめ科学教育を教育目標としている。したがって、もし生物学の講義において進化論を教えるべきところで創造論を教えれば、学生はだまされたことになる。学生は公表された教育目標通りに学ぶ権利をもつので、講義内容もその目標に拘束されるはずである。ちなみに、今回の事件の意外な副産物として「みんな真剣にシラバスを書くようになった」とハファニック学科長は苦笑いでいた。

このように講義内容はディシプリンという看板、学生のレベル、公表された教育目標によって制限を受ける。その意味で、教員の「学問の自由」の権利も一定の制限を受けているのである。

もちろん今回の事件で「学問の自由」の権利が公立大学における創造論教育を認めるという見解が確定したわけではない。しかし結果として、1人の創造論者の教授がこの権利を主張することで、創造論教育の講座を獲得したのである。かつて1960年代に最後の反進化論州法を裁判で葬り去ったのが「言論の自由」を主張した高校の生物学教員であったことを思い起こすと、今回の結果はまことに皮肉である。

最後に学生の立場についてふれなければならない。学生の抗議に端を発した事件が結局彼らの不満を解消できないままに終わったことは残念である。ケニヨン教授がこれまで通り教えると明言している以上、これからも学生は「インテリジェント・デザイン」説を生物学の一部として拝聴しなければならない危険にさらされることになる。

確かに、「学生に判断させる」という教え方は学生の自主性を重んじているように聞こえる。しかし、現実にはそうでない場合が多い。耳を疑うほど乱暴な話だが、たとえば中学や高校では教員がクラスの子供たちに多数決でどちらが正しいかを決めさせる場合もあるという。そして試験ではどの生徒も多数決にしたがった答えを出さないと合格しない。また、先生の見解や信条と対立する見解を答案に書ける子どもはアメリカでも少ないだろう。州立サンフランシスコ大学でも、あるいは単位をとるために創造論をうけ入れる学生が出てこないとも限らないのである。

このように現代のアメリカでは宗教と科学の対立が、おそらくその調整をもっとも必要とする教育現場で、大きな障害となっている。中学・高校だけではなく、大学でも創造論教育が堂々に行われるようでは、まともな進化論教育を受けている学生の数は意外に少ないのかもしれない。<sup>6</sup>このさきアメリカの進化論教育、ひいては科学教育の見通しは決し



て明るいとはいえない。



学科長室のジョン・ハファニック教授

「科学の時間に科学を教えろというのがそんなにおかしいことなのか。」

ハファニック学科長（上の写真参照）の怒りに、アメリカ科学教育の大問題が集約されている。

#### 注

<sup>i</sup> 学生からの不満がハファニック学科長のもとにはじめて寄せられたのは、1992年10月15日の電話であった。これはケニヨン教授が問題となる講義をした当日である。

<sup>ii</sup> D H Kenyon, "Biology 100, Fall 1992, Lecture Notes for Topic IV: The Genesis of Life on the Earth"

<sup>iii</sup> “Punctuated Equilibrium: A Report of the Academic Freedom Committee”

<sup>iv</sup> San Francisco State University, “Guidelines for Academic Freedom and Responsibility, Approved February 9, 1971”

<sup>v</sup> San Francisco State University Department of Biology, “Resolution in Support of Appropriate Curricular Standards”

### 参考文献

Greg Bias, “Creationism debate alive at SF State,” *Golden Gate*, October 7, 1993, p.1,3.

Michele N-K Collison, “Biologist’s Theory of Creation Gets Him Into Hot Water at San Francisco State U.,” *The Chronicle of Higher Education*, January 19, 1994.

Key Davidson, “S.F. State, professor battling about creationism,” *San Francisco Examiner*, January 4, 1994, A-1, 12.

Percival Davis & Dean H Kenyon, *Of Pandas and People: The Central Question of Biological Origins*, Second Edition, Dallas: Houghton Publishing Company, 1993.

Editorial, “Charles Darwin in San Francisco,” *The Washington Post*, January 8, 1994.

Raymond A Eve & Francis B Harrold, *The Creationist Movement in Modern America*, Boston: Twayne Publishers, 1991.

Gerald Holton, *Science and Anti-Science*, Cambridge: Harvard University Press, 1993.

Liz Rank Hughes, ed, *Reviews of Creationist Books*, Second Editions (First edition edited by Stan Weinberg with the assistance of Paul Joslin), Berkeley: The National Center for Science Education, Inc, 1992.

Phillip E Johnson, *Darwin on Trial*, Second Edition, Downers Grove: Inter Varsity Press, 1993.

Laura Kurtzman, “Teacher wins fight over creationism,” *San Jose Mercury News*, January 11, 1994, p.A-1, A-9.

Edward J Larson, *Trial and Error: The American Controversy over Creation and Evolution*, Oxford: Oxford University Press, 1985.

George M Marsden, “Religious Professors Are the Last Taboo,” *The Wall Street Journal*, December 22, 1993.

Stephen C Meyer, “Scientist stifled from teaching life’s origins,” *Oregonian*, January 4, 1994.

Henry M Morris, *The Long War against God: The History and Impact of the Creation/Evolution Conflict*, Second Edition, Grand Rapids: Baker Book House, 1990.

Henry M Morris, *History of Modern Creationism*, San Diego: Master Book Publishers, 1984.

Ronald L Numbers, *The Creationists: The Evolution of Scientific Creationism*, New York: Knopf, 1992.

Christopher P Toumey, *God’s Own Scientists: Creationists in a Secular World*, New Brunswick: Rutgers University Press, 1994.

George E Webb, *The Evolution Controversy in America*, Lexington: The University of Kentucky Press, 1994.